ドクター のリレー講座

知っていますか？ 下肢静脈瘤のこと

心臓血管外科

相川（あいかわ） 志都（しづ）

下肢静脈瘤ってどんな病気でしょうか？

足の静脈がぽこぽこと瘤（こぶ）のようになる病気です。瘤になる静脈の場所などにより、いくつかのタイプに分かれます。通常症状が出るのは伏在型静脈瘤（ふくざいがたじょうみゃくりゅう）です。

下肢静脈瘤のタイプ

A：伏在型（ふくざいがた）静脈瘤：浅い静脈の幹になる大・小伏在静脈に逆流がある

B：側枝型（そくしがた）静脈瘤：伏在静脈に逆流がなく、その先の枝になる静脈のみに逆流がある

C：網状（もうじょう）・クモの巣状：1-2mm、<1mm といった細い静脈が皮膚に浮かび上がってみえる

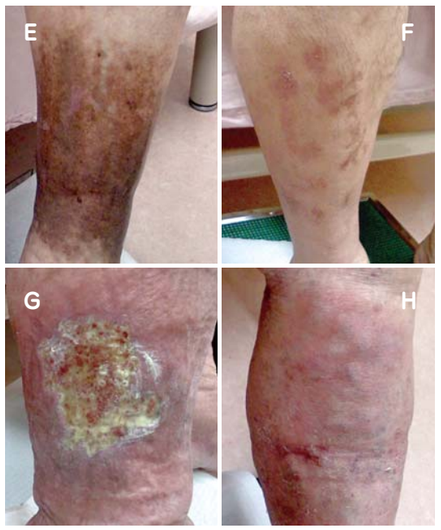
原因はなんでしょうか？

静脈は体で酸素や栄養を使った後の血液が心臓にゆっくりと還っていくための血管で、手足の静脈は所々に弁があり、逆流しないように防いでいます。特に足の静脈は、足を下ろしている時間帯は重力に逆らって流れるため、弁の調子が悪くなり逆流するとその影響が強く、静脈がよどむ（うっ滞）ようになります。うっ滞の強い状態が続くと静脈が徐々に瘤化し、いろいろな症状につながっていきます。

どんな症状が出るのでしょうか？

足のだるさ（下肢倦怠感）、攣（つ）りやすさ、むくみ（浮腫）、瘤の部位の痛みや痒み、などがあります。皮膚に近い浅い静脈で起こる病気なので、皮膚にも炎症が起こることがあり、湿疹や色素沈着・皮下脂肪の炎症（うっ滞性皮膚炎）、ひどくなると潰瘍（うっ滞性潰瘍）などに至ることがあります。時に、瘤化した静脈内に血栓ができることがあります。血栓性静脈炎と呼ばれ、深部静脈血栓症（足の深いところを通る静脈に血栓が出来る）と比べ肺塞栓症を起こすことは稀ですが、血栓のできた部位は腫れて痛みを伴うことが多いです。

下肢静脈瘤の症状



E・F：うっ滞性皮膚炎

G：うっ滞性潰瘍

H：血栓性静脈炎

どんな人に多いのでしょうか？

一般的には女性が男性に比して多く、妊娠出産もリスクとなります。加齢、立ち仕事・すわり仕事などの生活環境、血縁に静脈瘤の方がいる方、肥満の方などにも多いといわれています。

検査はどんなことをするのでしょうか？

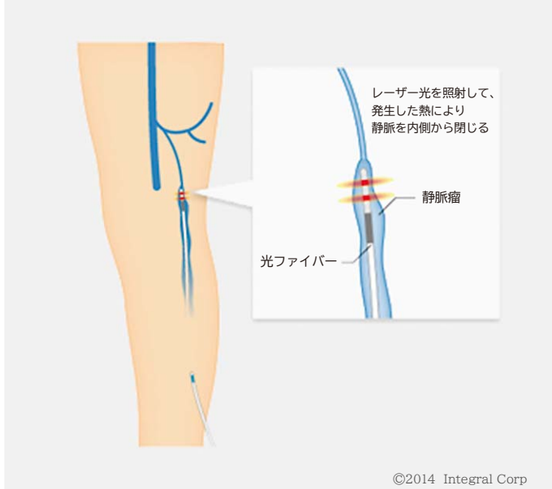
伏在静脈の逆流の有無は外からは分からず、外来時に血管の超音波検査を行います。併せて深部静脈に血栓などがないか調べます。

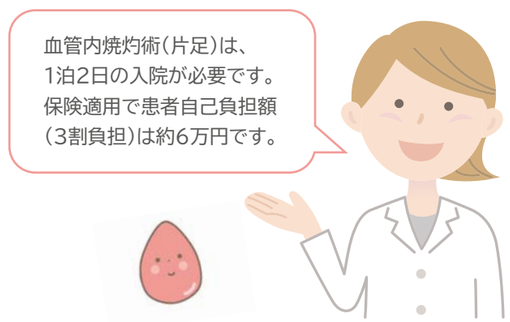
治療はどんな方法があるのでしょうか？

命にかかわることは少ないですが、残念ながら自然に治ることはありません。まったく症状がない方は、そのまま経過観察となることもありますが、症状が強い場合は治療を考えます。

治療の基本は、症状の原因となる静脈のうっ滞を和らげることです。最初の治療は圧迫療法で、通常は医療用弾性ストッキングを着用します。足首にかかる圧迫圧を基準にふくらはぎにかけて段階的に圧が弱くなるようになっており、圧の強い足首から弱い膝方向へ血液を押し戻す手伝いをしてくれます。静脈瘤では弱圧（20mmHg前後）から中圧（30mmHg前後）のストッキングを着用します。つまり通常の靴下よりもきついことが効果につながりますが、その分サイズの調整、脱ぎ履きのコツをつかむことなどが重要となり、当院では外来時に必要性の説明とともにその指導をしております。静脈逆流を止める治療ではないため、圧迫療法のみを行う場合は継続が必要です。

伏在型静脈瘤に対する手術はいくつかの種類がありますが、どれも静脈うっ滞の原因となる伏在静脈の逆流を止めることを目的としています。現在当院で最も多く行われるのは血管内焼灼術です。膝下の大伏在静脈もしくは下腿背側の小伏在静脈に針を刺し、先端からレーザーが出る機械を通します。対象の血管を中からレーザーで焼灼し閉塞させることで、逆流を止めます。伏在型静脈瘤に伴う下腿の側枝瘤も特殊な器具を用いて3mm前後の創部で切除が可能です。手術は局所麻酔で行いますので、術後すぐに歩いたり、お食事をとったりできます。手術後1カ月ほどは弾性ストッキングの着用が必要です。



最後に

下腿の筋肉は静脈を押し流すポンプの役割をするため、適度な運動、立ち仕事の軽減もしくは立ち仕事中でもできる足首運動、体重管理などを組み合わせて、下肢静脈瘤の悪化を予防していくことも大事です。それでも気になる症状がある場合には、当院へご相談ください。症状やご希望に合わせ、治療法を検討してまいります。